

科学と罪とスポンサー

アーヴィング・ルイス・ホロヴィッツ

翻訳・解説 後藤 将之

This article was first published in *Science, Sin, and Scholarship: The Politics of Reverend Moon and the Unification Church*, pp.260-281, edited by Irving Louis Horowitz, published by The MIT Press, 1978.

This Japanese-language translation of chapter 16 of *Science, Sin, and Scholarship* by Irving Louis Horowitz has been authorized by Mary Curtis Horowitz. A not-exclusive translation right is directly permitted to Masayuki Goto and to *The Seijo University Arts and Literature Quarterly*.

5年間で5回目になる「科学の統一に関する国際会議」は、1976年11月、「絶対的価値の探求」を論じるために開催された。それが首都ワシントンのワシントン・ヒルトン・ホテルにおいて、そしてその前年にはニューヨークのウォルドーフ・アストリア・ホテルにおいて、比較的贅沢に開催されたことは、まるで異例ではない。学術的な会議が裕福な環境で行われることは、長きにわたって知識階級の特権とみられてきた。異例なのは、あらゆる国のあらゆる領域からの学術的スターたちの、大胆に折衷的な出席であった。さらに異例なのは、これらの年次会合をスポンサーした男が、創設者にして基調者たる文鮮明師、統一教会の精神的指導者だったことである。スポンサーは、1976年の会議に出席するようにと数百人の学者を集めた。過去の実績から、彼らは当然、高い期待をもたれた。

会議の議長は、ノーベル賞受賞者のジョン・エクルズ卿 Sir John Eccles だった^{訳注1)}。4つの部会の委員長は、哲学代表のフレデリック・ソントグ Frederick Sontag、社会科学代表のモートン・A・カプラン Morton A. Kaplan、生物科学にはケネス・メランビー Kenneth

Mellanby、そしてノーベル賞受賞者のユージン・P・ウィグナー Eugene P. Wigner が物理学・化学部会の基調講演者だった。グループの委員長と、アメリカと国際のアドバイザーのリストは、学術世界の、あるいはその世界の各分野での、紳士録のようにみえる。そこにはMITのダニエル・ラーナー Daniel Lerner、イェール大学のハロルド・ラスウェル Harold Lasswell、ヘブライ大学のダン・V・セグレ Dan V. Segre といった社会科学での著名な人物たちがみえる。哲学者たちもこれに劣らぬ顕著な才能であり、リチャード・L・ルーベンスタイン Richard L. Rubenstein、カール・ポッパ―卿 Sir Karl Popper、ミケル・デュフレンヌ Mikel Dufrenne、そしてジョフリー・パリンダー Geoffrey Parrinder が含まれていた。さらに、アーサー・ケストラー Arthur Koestler ら文学界からの高名な人物達もおり、続けて生物学のポール・A・ワイス Paul A. Weiss、医学からはウルフ・フォン・オイラー Ulf von Euler、さらに物理学からは、どちらもノーベル賞受賞者のゲルヘルト・ヘルツベルク Gerhard Herzberg とウィリス・ラム Willis Lamb である。これはどうみても、傑出した学者と思想家のリストである。

このリストをどう配列しても、参加者たちは、好きなことよりも嫌いなことで結びついていたようにみえる。そこには絶対主義者も相対主義者も、一元論者も多元論者も、民主主義者も独裁者も、ヨーロッパ人もアメリカ人もいた。けれどもおそらく、これらの威厳ある人物たちが、絶対的価値の探求への当然想定される共通関心以外にも共通して持っていたものは、彼らが共産主義の脅威と呼んだものへの、共有された反感であった。

自己規定によって、会議の話題は、いかなる絶対的価値が科学と社会に存在するか、だった。この主題の選択は、ひるがえって、諸科学の間には調和が存在し、したがっておそらく学界には価値が存在するという認識にもとづく。けれども、過去の文の会議の刊行物が騒ぎ立てている不協和音から示されるのは、各参加者が代表していたのが、スポンサーの関心よりも、スポンサーが教会であるこの会議に彼らが出席することで、統一教会に与えられる正統化だったことである。

歴史・芸術・文学・科学に現れる、価値と宗教と絶対的価値の問題の相互関係に関する強調は、まちがいに統一教会の立場にとって、ひと

つの知的な支柱と意図されたものである。その立場は、宗教的な普遍性に依拠するアメリカ（および韓国）と、無神論の共産主義に依拠したソ連（および北朝鮮）の間の最終決着が、20世紀に与えられるというものだ。こうした理論は、最も古くさい「冷戦政治家」の修辞の使用もためられる過去の時代への、粗雑な先祖帰りに聞こえる。しかし、この会議がどのように描かれようと、それは明らかに、過去の世代の知識戦士の、学術的な反共産主義の最後の熱狂を示していた。

この会議に出席するために彼らが受け取った資金よりも、「自由世界」という概念への彼らのイデオロギー的コミットメントの方が、これらの人々の大多数の参加を説明している。けれども、彼らが20世紀に再建しようとするプラトンの世界と同様、この会議の参加者は3つのカテゴリーに分けられていた。「旅行、ホテル、そして公式の食事のすべての出費が支払われる」傑出した人々と、「自分の旅費」は払わねばならないが「ホテルの出費と公式の食事は支払われる」学術コミュニティ外部の指導的な立場にある著名な人々と、「旅費とホテル代は自分自身で払わねばならない」が「公式の食事は支払われる」将来有望な若き新参者である。このプラトンの3区分の禁欲的な威厳を損なうのが第4のカテゴリーの人々であり、その参加から相当程度の謝礼金を受け取るほどに、組織的にも知的にもきわめて重要だと考えられた人々だった。〔プラトンは『国家』などにおいて、魂の三区分と国家の三機能について述べた。〕^{訳注2)}

生み出された論文はいわば大げさな賞賛であり、ひとが自分の専門能力の範囲を超えたときに書くようなものだった。にもかかわらず、人々の品質と、それに劣らず会合の規模が、相対主義の宇宙における価値の崩壊についての共有された広範な知覚を示していた。その意味で「第5回科学国際会議」は、前衛による後方への逆進であって、ひどく騒々しく、社会科学での機能主義と物理学での相対主義への、いっそう大きな保守的反応を示していた。

これは明確な違いのある会議だった。ICUSはたんなる会合ではなかった。多くの学問と職業にわたる人々に影響する実際的な問題への、共有された関心をもった集団というだけではなかった。それは、ただ絶対性という防壁だけが、全体主義的なプラグマティズムの潮流をせき止めることができる、という強固な先験的信念に依拠した会議であった。

彼の知識人たちをこれらの会議に招集するのに使われた文師の仕事のスタイルと、韓国による学者への言い寄り一般の間には明らかな類比がある。『クリスチャニティーと危機』 *Christianity and Crisis* [プロテスタントのオピニオン誌] に掲載された記事で、フランク・ボールドウィン Frank Baldwin は、韓国ロビーの性質と実体を記録している。カリフォルニア州の議員ロバート・レジェット Robert Reggett の事例が例証するように、支援を確保するのに使われる技法はきわめて例外的なものである。それどころか、時には意識もされずに、また時には当人の表明された意志に反してさえも、一定範囲の学者を利用することが——ハドソン研究所のハーマン・カーン Herman Kahn、ワシントン大学のフランツ・マイケル Franz Michael、そしてウエスト・ミシガン大学のアンドリュー・ナム Andrew Nahm の場合のように——示しているのは、韓国が取っているアプローチと文師のそれとが近いものであり、相互浸透が激しいことである。

『ニューヨーク・タイムズ』の報告では、統一教会は、じっさいに、韓国の外交通信組織の代表と外交封印袋〔機密書類などを封印した専用袋〕に接近することができる。首都ワシントンの外交全国銀行 Diplomat National Bank に関連する人々が明らかにしたところでは、韓国ロビーと統一教会には強い相関関係と結びつきがある。とはいえ付言すべきなのは、文師のアメリカの基盤が確立されるにつれ、彼の資金源もしいに多様化して、彼と韓国政府との結びつきも減少しているようにみえることである。

文の配下の人々は、教訓をよく習得している。いかなる宗教運動にも、ある種の民間イデオロギーがなければならず、街路の集まりに参加するどんな熱狂者にも、それに対応して、街頭の行為への知的な見映えだけでなく一定のバランス感覚をも提供する、言行一致の人物が必要である。この会議に出席した知識人たちは絶対性を探究していたのだろうが、これらの絶対主義者の方でも知識人を求めていたのだ。この共通基盤の上で、彼らは、科学の統一に関する国際会議で出会ったのである。

科学と、政府のパトロンやスポンサーとの適正な関係に関する、痛みをともなった倫理的かつ知的な 10 年間の対立ののち、注意深く潤色された一種の合意があらわれていた。その合意の根本は簡明である。すなわち、様々な形態の科学には、顕在的および潜在的な価値の両者がある。

さらに、科学と政治の間でどんな相互作用が生じようとも、最重要なのは、一方による他方の取り込みや抹消が決して生じない関係を維持することが重要だという感覚である。かつて誰も、政治システムの自律性を疑ったことはないが、多くの者が、科学の自律性に疑念をさしはさんできた。

社会学者は、連邦政府と行政からのパトロン制の問題を扱うために、相異なった戦略を発達させた。一方の極では、彼らは、いかなるそうした関係も許可されないと否定した。別の極では、彼らは、その関係が社会調査の先行条件であって、科学的探求者にとっての特権であると主張した¹⁾。けれどもこれら2つの極のあいだには広範な帯域があった。どこに線を引くかが最重要点になった。議会の委員会の前で宣誓するかしないか、財団の支援を受け取るか拒否するか、純粋な調査と応用の調査を、また理論的な研究と課題志向の研究を、区別するのか。仮にいかなる堅固な合意が得られずとも、少なくとも価値の問題についての感覚が鋭くなった。おそらく彼らのもっとも健全な内省において、社会学者たちは、自分が誰のために働いているのかを注意深く考えた。彼らは、たんに取り組んでいる主題のみならず、調査の目的についても考察した。

たしかに、価値自由な調査に対する過激な批判は、ときとして奇妙に保守的な結果を生み出した。ほとんど全ての職業的な集まりが、財政と大学のコミュニティにおける自分たち自身の立場をまず護衛するために、大急ぎで、手続き規則や、倫理委員会や、審査委員会を作り出したので、もし深刻に受け止めるなら、あらゆる革新的な調査がほぼ完全に停止されることに帰結しかねないようになった。リスクをとる調査は、少なくとも社会科学の領域を、安全かつ疑問視されない研究方向に手渡した。他方で、そうした規則に固執した学者はほとんどいなかったもので、彼らは、大学院生としてその訓練を受けなかった、社会学者の間での意識昂揚 *consciousness raising* [1960年代に唱道された意識変革法] という利得を受けることになった。

けれども、どんな回転にもよじれがある。社会学者を含む科学者は、文鮮明師が代表する統一教会のような宗教的または疑似宗教的な組織に、どう反応するかをうまく決定できなかった。第5回「科学の統一に関する国際会議」は、ここでの要点である²⁾。我々が知らないこと、そしてスポンサーが明らかに示そうとしないことは、(私自身のように) コン

タクトされたが参加を拒否した学者の数である。非公式のサンプルから私が知っているのは、社会学でのシーモア・マーチン・リップセット Seymour Martin Lipset、アミタイ・エチオーニ Amitai Etzioni、そしてエリーズ・ボールディング Elise Boulding、哲学でのエルンスト・ネージェル Ernst Nagel とアブラハム・イーデル Abraham Edel、経済学でのケネス・ボールディング Kenneth Boulding、そして法と国際関係でのソール・メンドロヴィッツ Saul Mendlovitz といった指導的な学者たちが、招待を断ったことである。おそらく 360 人の参加者というレベルに至るには、その 10 倍の数がコンタクトされねばならなかっただろう。直接郵送のマーケティング活動への 10 パーセントの対応率は、優秀というべきである。いずれにせよ争点は残る。このような組織との提携によって集められた会議への参加には、どんな規則があるのか？

文師の罪への過度の拘泥は望まざとも、誰かの参加を疑問視させるスポンサーの世俗的な活動には、少なくとも言及せねばならないだろう。

ひとは単純に、文師を悪い冗談だと帳消しにして、ジョージ・バーナード・ショーのバーバラ少佐が、自分の善意の仕事がすべて、第 1 次世界大戦を利用した軍需製造業者から財政負担されていたのを知った時、彼女にアンダーシャフトが言ったように、「それで救世はいくらかね？」と言うかもしれない〔ショーの戯曲の「バーバラ少佐」は、救世軍（プロテスタントの社会福祉団体）の熱心な慈善活動家だが、資金の出所を指摘される〕。ノーベル平和賞と、20 世紀初めにアルフレッド・ノーベルが、主として戦争遂行行為のための化学製造業から富を得た事実、注目が向けられるかもしれない。

カネの系譜学のある地点で、これほどの規模の献金が参加度と無関係だという無条件の否認ほどにありえないものはなくなる。ひとは、資金源と、資金がどう使われるのかを必ず区別しなくてはならない。故モハンダス・K・ガンジー Mohandas K. Gandhi〔インドを独立させた通称マハトマ・ガンジー〕は、国民会議で同僚だった農民の一団から、地主たちから政党活動のカネを受け取ったことは間違いだと告げられた。彼らは、革命がまだあまり勝利されず、土着の地主たちが進んでくる前に英国の植民地主義者がインドの岸を離れていない、という考えに抵抗があった。ガンジーの回答は、単純に「カネは決して汚くない——ただ人間だけが汚い」だった。これはうまい対応だが、争点は残っている。す

なわち、取引されるものがしばしば単なる資金ではなくサービスであるからには、個人献金者と科学の受取者の適切な関係とは、どんなものなのか？

状況は、倫理的に言ってまったく不明瞭とはいわずとも、あいまいなままである。この国際会議への参加を決めた人々を、単純に、倫理的な過誤だと非難して後悔を要求するのは、彼らへの愚鈍な不公正である。それでも、この会議の活動に参加せず、そのスポンサー制を吟味するという、圧倒的に多くの理由をもった争点がある。カネは決して汚くないが人間は時として汚い、と信じ続けている人々へのしかるべき敬意をもって、私は論じたい。提起される疑問は、資金の支出や、会議のスポンサーたる熱狂的信者と選ばれし者たちの潔白さを、はるかに超え出ているのだと。

参加に関する決定は、経験的な情報をもとに決められる。そこで、文鮮明師と、彼のイデオロギー的な提供物と、統一教会の組織について、議論の余地なく一般に知られていることを素描するのが重要になる。私は、この教会の新人リクルートと改宗のテクニクについての議論は避ける。その主題については、社会学³⁾と心理学⁴⁾の立場から多くのことが記されてきた。それらを超えて、すべての改宗と説得のテクニクには、感情的な訴求と非合理的な主張が含まれると、いつでも論じうる⁵⁾。これについて、文師の教会は、全体主義の運動一般とは異なるとも、いっそう有害だとも非難することはできない⁶⁾。そこには、どんな宗教勢力よりも大衆運動の社会学と強く関連した、一連の、比較的よく確立された組織の連動とイデオロギー的な宣言がある。このレベルで、相互作用の境界地点にあるにしても、参加の問題が生じる。

文鮮明師は、いくつかの重要な点を認めている。第1に、彼は韓国の工場での武器生産に関与している。ある『ニューヨーク・タイムズ』の記事では、彼の工場の生産の10パーセントが軍備に向けられている⁷⁾。第2に、韓国における彼の産業コングロマリットは、年額1500万ドルの売上をもち、重機から小火器まであらゆるものの生産に関与している。第3に、ウォーターゲートのスキャンダルに続いて、文師は、当時苦戦していたリチャード・M・ニクソン大統領を支援するメディア・キャンペーンを組織した。そこには、アメリカの新聞に出された、「神がニクソン氏を大統領に選んだ。したがって、ただ神だけが彼を追放する権威

をもつ」とアメリカ人に告げた全面広告が含まれている。第4に、文の通訳にしてもっとも近い同僚である朴普熙中佐 Colonel Pak Bi Ho といった人物を通して、一方の朴正熙 Park Chung Hee 大統領から他方の韓国 CIA へと走る明瞭な線が存在するように見える。韓国大統領とその情報収集機関の両者に、文と彼の教会が関係していることは秘密にされているが、韓国の独裁制〔1988年まで続いた〕の内部で動いている教会が公式の是認なしには存在しえず、急速に拡大することもさらにできないことは、ほぼ疑う余地なく見える。

文師は、合衆国では、統一教会よりも多くの仕事をしている。「自由リーダーシップ財団 Freedom Leadership Foundation」といった政治メカニズムを通して、彼は、アメリカ軍と韓国への経済支援のためのロビー活動をする。ニクソン政権の最後の数年間、彼の「公正な平和のためのアメリカ青年団 American Youth for a Just Peace」は、共和党右派を補佐する重要な導管だった。「国際文化財団 International Cultural Foundation」は、文師の知的コミュニティへの浸透を示す。これらの補助的な創設物は、統一教会それ自体と同じく非課税であり、非営利の教育組織だと登録された宗教組織に付属すると宣言されている。このようにして文師は、相当程度の資産を獲得でき、それは合衆国内だけでも2000万ドル以上と推定されている。彼の財政資源が、彼の組織が議会ロビーと他の形態の政治活動にかかわることを可能とするが、それはおそらく、非課税資格の法的な範囲を超えている。

文のイデオロギーは、あらわで飾り気のない反共産主義の主題で組織化されている。『ニューズウィーク』誌での珍しいインタビュー記事における文師によるキーポイントでは、メシアによる福音伝道主義〔救世主を中心とするキリスト教の外部への布教拡大〕が中心にある。「統一教会はもうひとつの宗派なのではない。それは世界を救済する運動である」⁸⁾。どうやら神が文師に治療させようと命じた3つの頭痛の種とは、「道徳的な堕落、キリスト教界の分断、そして世界の主要な悪の勢力たる共産主義」である。文は、これら3つのサタンの傾向を逆転させることに、自分の運動を捧げていると考えている。

文師は、自分がメシアだと直接に主張しない程度には頭脳明晰である。けれども彼は、自分が「ただ神の指示に従っているだけだ」とは現に述べている。あらゆる命あるものからなぜ彼が選ばれたのかは、韓国の特

殊な性質で説明されている。それについて彼はこう言及する。「天上の世界と板門店のサタンの世界の間にある陣容である。我々は韓国に決着をもたらさねばならない。とりわけ共産主義に対する韓国の勝利は、韓国だけのものではない。私は、それを対立の舞台に戻すためにアメリカに來た。アメリカは責任から退却している。それはベトナムでも起こった。アメリカは世界の運命を決定する」。

まるでメシアのやり方で、文は、「史上多くの預言者たちと同じように行為することを命じられた」と主張する。さらに彼は、自分の信徒たちに、自分は「日々、神と交流している」と保証する。神学と政治との混合はきわめて密接で、それらを分離する試みさえほとんどできない。それでも、1976年6月のヤンキー・スタジアムの催しでの基調講演の基本テキストに「アメリカに祝福あれ God Bless America」といったスローガンを選択することで、また歴史上の神の目的をアメリカの勝利主義と同一視することによって、彼は、自分の政治的メッセージについて、ほとんどいかなる疑問点も残していない。

文の6月26日のヤンキー・スタジアムでの宣言は、次のような語句に支配されていた。「私の堅固な信念は、アメリカ合衆国が実際に神のかたちに創造された、ということだ。明らかに、このアメリカというユニークな被造物は、神の被造物である」。文によるアメリカと神との結びつけはきわめて密接になり、一方が他方なしに生き残れるというわずかな暗示すら疑問視される。「もしアメリカが、世界の指導国家として神の祝福を維持したいならば、神とのパートナーシップを形成せねばならない。神は、あなたの家庭におられるか？ 神は、本当にあなたの教会におられるのか？ 神は、この社会と国家におられるのか？ 神こそがセメントである。神をもって、アメリカはコンクリートのようにまとまっていられる。けれども、もし神が離れれば、それは砂のようになるだろう。洪水が来れば、すべては流されるであろう」⁹⁾。

文の運動は、まちががなく研究する価値がある。じっさい、さらなる研究の要求がなされてきた。完全に脱個人化させる社会システムの心理的影響を検討する手段として、文のそれのような心理-宗教的カルトの研究への要求が留意されてきた。パイオニア的な社会調査者たちの著作では、文の運動は、公正で、時としてきわめて同情的ですらある扱いを受けてきた。とはいえ運動の科学的な分析は、あきらかに、その同じ科

学者による運動への参加と同じではない。これが、我々が最終的に立ち返るべき争点である。

20世紀の潮流と哲学に影響された西洋文化の中にいる誰もが理解するように、国際会議が用いた「科学の統一」とは、絶対的価値を探求することを意味するものではまるでなかった。それは、ウィーン学団の実証主義と経験主義を組織化している前提であって、とりわけカルナップ Carnap、シュリック Schlick、ヴィトゲンシュタイン Wittgenstein そしてノイラート Neurath の面前で、哲学的思考を科学的分析的な時代へ無理にでも運び込み、リーマン幾何学とアインシュタイン物理学とマルクス社会学さえをも意識させることであった。何よりも「科学の統一」が意味したのは、それが物理的レベルにあらうと心理的レベルにあらうと、経験の内容を、世界の構造と結びつけることだった。議題の中心に絶対的価値の探求を掲げた国際会議のために、「科学の統一」という語句を収奪することを通して、科学の実験的かつ相対主義的な根拠に対する正面攻撃をしかけるというのは、おぞましいユーモアとして銘記されるべきことである。この会議への科学からの参加者たちは、イデオロギーや神学と同じく、科学というものも、絶対の探求者たちがそのために戦うのに劣らないほど、根気強く戦われねばならない根本的な立場であることを失念していたのである。

『US ニュース・アンド・ワールド・レポート』によれば、「100万人から300万人のアメリカ人が、ほとんどが20代か10代後半であるが、200から1000の〔宗教的な〕カルトに関係している」という。それらのうち最大かつもっとも論争的なものが文鮮明の統一教会である。この集団は、合衆国内に3万人の、平均年齢24歳の信者たちをもつとする¹⁰⁾。数人の宗教学者が明らかにそう信じているように、これらの集団はドラッグ問題の治療と回避の健全な方法を示し、あるいは反社会的行動を克服するための効果的な方法であって、文師がスポンサーになっている会議への参加は、こう信じるなら筋の通ったことになる。けれども、会議への参加を許可する事実と価値との間には絶対的な亀裂があるという視点をとれば、そのスポンサー制がいかなる性質や出所や目的であれ、それは、おそらく最終的に何らかの経験的な拠り所と結びつくはずの道徳的な意志決定の、放棄を示している。見て見ぬふりをすることは、参加が、まったく馬鹿げているとはいわずとも、疑問視されるような活動

を正統化しかねない場合には、とりわけ危険なやり方である。

絶対的価値の探求に乗り出し、組織の前提として全体的な真理を用いることによって、ひとはまさに期待されることをする。すなわち、宗教、哲学あるいは社会科学や人文学における絶対的価値に到達して、したがって、最も重要な疑問を締め出すことを、である。その疑問とは、このような探求は行われるに値するものなのか、ということだ。おそらくあるアナロジーが、つまり例のしばしば中傷される推論の形式が、ここでは必要だろう。アメリカ帝国主義と、いかにしてそれを世界から消し去るかという主題の、ソ連での会議への出席を求められたとき、このようなスポンサー制と環境のもとでは、ソビエト拡張主義の性質と、いかにしてそれを抹消するかを探求することは、きわめて困難になると仮定するのが妥当ではないだろうか？ アメリカが帝国主義抜きだというのではない。むしろ、こうした排他主義の用語で問題を枠付けることは、結果を変造するということだ。同様にして、すべての社会科学に共通する絶対的価値がじっさいにあるのかもしれない。けれども最低限として、すべての社会科学に共通する相対的価値への探求が、並行して行われるべきである。

ひとつの実例として、ICUS : V の社会学パネル内で扱われた主題をとりあげよう。現代社会における犯罪の原因と予防、である。社会を完全に停滞させないかぎり、完全な犯罪予防はまずまちがいなく不可能だろう。犯罪は、産業の成長それ自体と同様に、現代社会に典型的である。絶対という理念の探求を満足させるようなスローガ的な用語によって、問題を枠付けることは、その営為の科学的な性質についての深刻な疑問を生じさせる。

会議、講義、セミナーその他へのどんな参加も、潜在的な按手〔頭を手を置いて祝福し、聖霊の力を与えるキリスト教の儀式〕を含意している。参加は、進行中の正統化プロセスを代表している。出版社がその製品を学術ジャーナルで宣伝すれば、彼らはそれらのジャーナルに対して価値ある何ものかを賦与している。学者が政治的公的なフォーラムの前で話せば、彼らは同様に、自分たち自身の個人的な信条に加えて、彼らに制度的に付属するものをも伝達している。このことは、学者がただ自分自身の名前においてのみ語っているというどんな免責事項が付けられていても、そうである。たとえば、この国際会議の予備的な告知では、

個々のパネルの議長の所属組織名は、議長の名前と同じだけ大きく印刷されていた。この会議のスポンサーが、この正統化装置の価値を知らなかったと空想するのは愚の骨頂であろう。それどころか、正統化こそが統一教会のスポンサーたちが得るのを期待したすべてであって、個々の貢献と論文とは、じっさいには問題ではなく、疑問視もされなかったとすら論じることができよう。したがって、ひとはこう尋ねる責務を負う。ということが正統化されているのか？

この会議のスポンサー制と性質とを意識するようになったとき、私は、自分の参加への不賛成を、マイケル・ヤング・ウォーダー Michael Young Warder に届けた。彼はこの会議の事務局長にリストされていた。とはいえ彼の主要な責任は、ニューヨーク州バリータウンにあるムーニー訓練センター Moonie Training Center の所長を務めることだった [Moonie は文師の信徒の意]。このセンターは、信奉者と改宗者を得るために権威主義的な心理学的テクニックを使っているとして、多くの親から苦情の対象になっていた。この関連では、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』誌に載った、どうして両性は分離されるべきなのかについてのウォーダーの指摘が、倫理の絶対性に関する彼の見解について、とても奇妙な洞察を提供している¹¹⁾。彼はこう言っている。「性的な分離によって、誰もが、真理への自分の研究と探求において、いっそう快適でいられる。彼らが混合されるやいなや、男子と女子は他のことを考え始める。我々は、今ではあまりに多くのセックスと乱交があると感じている」。とはいえ、この会議のためにウォーダーに与えられた住所は、ニューヨーク・シティの郵便私書箱だった。文のグループと彼との関連は、私が受け取ったどの情報にも示されていない。

ICUS の創設者が文鮮明師であることに彼の注目を促し、文師の役割について一定の明瞭化を求めた私の手紙への回答において、ウォーダーは単純に、発言の自由が維持されていること、文師の参加はこの集まりの最初の招集を行うことに限られていることを伝えてきた¹²⁾。招待状の冒頭の第1段落が、文師には言及せず、むしろワシントン・ヒルトン・ホテルでの会議の議長を務めるノーベル賞受賞者のジョン・エクルズ卿に言及しているのは、これと一致することに見えるかもしれない。もっとも注意深い精読によってのみ、文師の名前に行き当たる。というのも、彼の名前は準備的な日程表には現れないからである。彼は、ICUS の会

合の組織に関する用紙の1枚にだけ、そこでも単に創設者とだけ、リストされている。やはり興味深いことに、すべての参加者のうちでも彼だけが、どんな関心カテゴリーも、地位や組織も与えられていない。おそらくは、全世界とそのすべての産物が、師にとってのホームだからであろう。

ひとりの社会学者として、私は、社会・行動科学のもっとも近く関連するアメリカと国際の諮問委員会のメンバーたちに連絡をとった。私が受け取った回答は、アメリカ学者の道徳の見事な一式を示している。ポモナ・カレッジの哲学教授フレデリック・ソントグは、回答者の支配的な思考を代表している。

私は、第5回のICUSの編成と論じられるべき案件について、参加するように招待された人々と同じく、相談されていたので、文師の役割はスポンサーだったということができる。会議を組織した人々はあらゆる助力が得られたが、関係した人々が選択した話題に沿って会議を構造化するあらゆる自由をも持っていた。私自身、この会議それ自体は、文鮮明師自身の宗教的教義といかなる点でも結びついていないと考えてきた。私が考えるベストの回答は、おそらく、会議の計画に責任を負った集団が公表した問題と話題以外のいかなる議題も私は知らない、ということであり、招待された論文から生み出された以外には、いかなる形式的な議論も計画されなかったということである¹³⁾。

シカゴ大学の国際関係論の特別教授であるモートン・A・カプランは、私と他の人々の懸念に誠実な理解を表明した上で、彼自身の経験を以下のように示した。「私は、去年、部会の議長および委員会の委員長として参加した。当人による10分間のスポンサー講演以外、会議の知的内容をコントロールしようという文氏によるどんな試みもなかった。これが変わると信じるいかなる理由も私にはなく、あなたも参加できるようになることを強く望みます」¹⁴⁾。

プリンストン大学の著名なノーベル賞物理学者ユージン・P・ウィグナーは、私にこう保証した。「文師は、私が出席した前回の会議の実質に影響しようとしなかった……オープニングのスピーチで文師は、誰もがができるかぎり自分の意見を明瞭に示すべきだ、また影響されたと感じ

るべきではないと言った」。ウイグナー教授は多年にわたる強固な反共産主義者として知られているが、これを強調するかのようにこう指摘した。「率直に言って、私は自分が出席する会議のスポンサー制にはあまり重きを置いていない。じっさい私は、共産主義政府がスポンサーになっている会議にも出席してきた」¹⁵⁾。

ロックフェラー大学の著名な生物学者ポール・A・ワイスもまた、前回の ICUS の会合は「きわめて建設的かつ非偏見的だった」と考える。けれども彼はまた、この会議が何のためだったのかについて、一種の哲学的な称賛をも示した。少なくともこの事例では、参加への決定を尊重することができるだろう。というも、ワイスの推論は、この営為への肯定的な知的判定に依拠しており、統一教会の会議の意図に共感的だからである。

実際のところ、しだいに科学においてすらみられる、人間の思考の細分化が気にかかるようになっており、それがどんな政治的またはセクト的な影響も示さないかぎり、私は、この活動を続けることに、いかなる反対も感じない。半世紀以上もの間、様々な基金や組織から研究支援を受けてきたが、私は一度として、彼らの収入源を調査したことなどない。けれども、私自身の決定の誠実性と非利己性を信頼してくれた他者の信義を享受してきたので、私の判断とは異なる他者の表現の良い点を、私は大いに評価している¹⁶⁾。

個人的な見解では、もっとも興味深い手紙は、友人にして同僚であり、この会議の社会学分野を主催して、現在はハワイのイースト-ウエスト・センターにいるダニエル・ラーナーから来た。彼の手紙は、スポンサー制それ自体に深刻な疑念を提起しており、したがって全文を提示するに値する。彼は指摘している。

私は、第5回の ICUS への参加者としての自分の支援を撤回しなかった。というのも私は、価値ある目的を支援しているいかさま師や変人、という考え方によく慣れてきたからだ。結局のところ、各位におかれては非常に聖人的なところはない。カーネギー、フォードそしてロックフェラーには。私の原則の唯一の要点は、財政的スポンサーが、いかな

るやり方でも、生産物に介入しないことである。私の4年間のICUSの計画との経験で、いかなる程度であれ、文の悪意ある手が見えたことはなかった。過去のセミナーと会議における私の役割は、私がAAAS〔アメリカ科学振興学会 American Association for the Advancement of Science、学術雑誌 *Science* の発行元〕やAPSA〔アメリカ政治学会 American Political Science Association〕のセッションに参加している時のそれと、まったく同じだった。私はあなたの辞退の決定を尊重するが、それはちょうど、マーティ・リップセットが、友人の誰だろうと参加することに強く反対したことを、私が理解したのと同じように、である。私は、文への彼の嫌悪を共有している。おそらくは変人のいかさま師なのだろう。けれども私は、ICUSが、価値ある科学的な精神の出会いを提供していると感じるし、文がそれを彼自身の間違った目的のために利用（または悪用）している何らかの堅固な事実が出てくるまでは、それに参加し続けるだろう¹⁷⁾。

あるレベルでは、我々は、程度の問題を扱っていて、絶対的な正誤を扱っているのではない。スポンサーがどれくらいのかさま師で、どれほどの変人なのかは無視できない。もちろん、誰かがいかさま師や変人だからといって、これが気ままな参加を与えるとは単純に主張できない。もしマフィアがスポンサーになって、「アメリカの生活様式としての犯罪についての会議」が開催されたとして、ひとは、最高水準の学者による完全に筋の通った一連の論文を想像できるだろう。けれども私は、スポンサーの変人性やいかさま師性が、結果に対して完全に無関係だとは、ほとんど想像できない。

別のレベルでは、我々は原理的な問題に直面せねばならない。カーネギーやフォードやロックフェラーの財団からの支援が吟味されねばならない機会もありうる。スポンサーがよりパワフルであれば、参加もより自動的だ、という公理があるわけでは全くない。けれどもさらに、ICUSと、アメリカ科学振興学会やアメリカ政治学会のセッションへの参加にアナロジーを描くことは、まったく要点を失することである。後者は我々の学会である。それらは全体的に、あるいは相当程度まで、職業的科学家としての我々自身によって作られた法と規範で統べられている。それが代表しているのは、あらゆる科学的営為の現行の状況に關す

る、専門家の意見の一定の合意である。

これが ICUS に関しても妥当するという主張ほど、ラーナー教授のアナロジーに欠けていることはない。個人的な偏愛を超えた専門的な影響力こそが、まさに文の会議に欠如している要素にみえる。諮問委員会は、粉飾の飾り以上にはほとんど評価できない。そのアドバイザーとしての役割が、いっそう多方面の組織での役割も許されるし促進すると、彼らの誰かが主張するかどうか、私は深刻な疑念を抱く。こうした役割は、意志決定の手段を保証するよりも、たんに正統性を提供しているようだ。私はまた、この組織のスポンサー制をみれば、これら尊敬された紳士たちの誰であれ、そうした役割を欲しがるかどうかさえ疑問に思う。したがって、ICUS を単純にもうひとつの専門的学会だとみなすことは、最良でも間違った認識であり、最悪では人間を信じないことである。さらに、しかもこれは偶然ではないのだが、AAAS も APSA も、論文を報告するのに「旅行とホテルと食事の全てが支払われる」提供を、どんな学者に対してもまったく行ったことがない。それは、ほとんどが当人の責任であるか、ある調査プロジェクトの結果が同僚の間で共有されてほしいと望む、大学や機関のそれである。スポンサーの気前の良さが、文師と彼の科学への関心について広く抱かれた関心の、少なからぬ源泉である。財政支援は、慎ましい種類のものであっても、躰のよい学術的な貧しさというかつての伝統で育てられた人々にとっては、比較的魅力的な誘引の形態であり続けている。

現在とはまったく異なる政治の文脈で、ハロルド・オーランス Harold Orlans は、10 年前、きわめて適切に指摘している。研究スポンサーと研究者を含む倫理問題の基本的な出所は、資金の付与に関連していると。「カネは自由財ではなく、どんな学術目的でも利用できるはずだが、分配できる資金をもつ人々は、自分たち自身の選択した目的と条件下でそれをする。これは回避しがたく、それを嘆いてみてもむなし」。政治と道徳性を、その両者を貶めるリスクをおかして混同しないようにと、オーランスは我々に求める。現実の環境下では、微妙な境界線はたやすくぼやけるとも論じうるだろう。それでも彼の結論は、そうした疑念をほとんどもたれないものである。「もしある組織の目的に同意しないなら、そのスタッフの道徳性を公然と非難せず、彼らの目的を変えようと試みて、その間は、彼らのカネを受け取らないことだ」¹⁸⁾。

大きな財政上の同調圧力を明らかに受けていない環境下では、これはいっそうたやすく達成できるはずである。

旅費、厚遇そして色々な用意などを受け取ることは、この語の巨大な研究資金という意味でのカネを構成しない、とも論じられるだろう。確かにそうである。しかしこれで、学者はいっそうノーと言いやすくなるはずである。資金に関する同様の大雑把な方針が、ICUSの会合にも適用できるはずである。知的根拠から許しがたいことは、文の勢力の目的を公然と非難しながら、それでもその業務には参加することである。私は、どんなスポンサーとも参加者とも論争したいわけではない。まちがいなく彼らは、参加する決定に至るまでに、長い間じゅうぶんに考えたのだろう。けれども、学術的な参加と正統化の根拠は、自分の参加する権利に賛同した人々によって、それをしないことを選んだ人々がそうしたより以上に、充分に考え抜かれるに値するとみえることは確実である。

私ひとりが、この会議における文師の役割が、完全に黙秘されているのではなくとも、穏やかに言っても注意深く覆い隠されている、と感じたのではない。「文化と技術センター Centre for Culture and Technology」所長のマーシャル・マクルーハン Marshall McLuhan は、自身もやはり国際諮問委員会のメンバーにリストされていたにもかかわらず、ウォーダー氏に宛てた私の質問状を受け取るまで、文のスポンサー制に気づかなかつたと私に言ってきた。「第5回の「科学の統一に関する国際会議」のスポンサー制をあなたが暴露してくれたことに、私はとても感謝している。「文」の名前は、想起できるかぎり、最初の招待状に出てこなかった。疑わしい文師の活動の見地から、私は喜んで自分の是認を撤回する」¹⁹⁾。不安な感情は、文がスポンサーになったICUSの会議の諮問委員会ですら生じていた。そのことが、マサチューセッツ総合病院の精神医学長であるシーモア・S・ケティ Seymour S. Kety にも反映している。彼のジョン・エクルズ卿への手紙は、マーシャル・マクルーハンの考え直しが、孤立した出来事ではなかったことを明らかに示している。

私は、第5回「科学の統一に関する国際会議」の委員会の委員長を引き受けるという招待と謝金を断りましたが、アメリカのアドバイザーの一人として自分の名前がリストされることには同意しました。私がこう

したのは、ジョン・エクルズやその他の、国際とアメリカの諮問委員会にいる人々への私の尊敬ゆえでした。私は、彼らが傑出した科学者であって、人間存在の威厳と政治的自由の防衛者だと知っていました。私はまた、今度の会議のテーマからも動機づけられました。「絶対的価値の探求——諸科学の調和」。さらに、科学者の中のまったく自由な考えの交換が特徴だった前回の会議への自分の参加についての、概して健全な思い出からも、です。

その時以来、私は「国際文化財団」が関連している統一教会とその創設者に関する一連の記事を、一般雑誌で目にしました。それは私にとって大いに懸念すべきものでした。この教会と創設者の動機と政略をめぐっては、重大な告発が行われています。私には、それを評価するための時間も手段も意向もありません。それでも私のアメリカのアドバイザーとしての登場が続くのは、これらの非難にもかかわらず、私が「国際文化財団」を支援していることを含意します。私は、これを心安らかににはできないので、したがって、以後の郵便と刊行物では、アメリカのアドバイザーのリストから、私の名前を削除してほしいとお願いせねばなりません²⁰⁾。

文師の仲間たちのしつこさは、路上で彼らのフォロワーからお誘いの声をかけられた誰もが知るところだが、さらに高いところにも及んでいる。初期の参加拒否にもかかわらず、世界秩序研究所 Institute for World Order 所長のソール・メンドロヴィッツは、招待状に悩まされ続けた。彼の回答もまた、この会議とそれが代表するイデオロギー的勢力に対して集まった広範な抵抗を示している。

私は、あなたが、これらの招待状をしつこく続けていることに、いささか驚いている。ご記憶のように、疑いもなく、あなたが1974年の会議を組織していた時、相対的に高額報酬と私の家族への便宜の申し出にもかかわらず、私はその会議に参加しようとしなかった。私がそうしなかった理由は、当時私が申し上げたように、文師の活動が、私には極めて不愉快に感じられる宗教的社会的政治的な活動形態を示しているという私の最終判断に基づいている。じっさい私は、これらの考えを、リチャード・フォーク教授とエリーズ・ボールディング教授と共有したが、

この兩名とも、あなたは間違いなくご記憶と思うが、当時、自分たちによる文師とその組織的活動への否定的な評定に依拠して、会議への参加を自分たちは断ったという手紙を配布することが、適切だと考えていた。したがって、もう一度、謹んで、私は、文師の仕事をプロモートする国際文化財団がスポンサーになっているこのイベントへの参加を、お断りいたします²¹⁾。

断片化の時代に、絶対的価値の探求は科学者と社会科学にとっての中心的な関心事だと信じている人々にとっては、この会議はよく意味をなしたのだろう。けれども、この会議が、変人、いかさま師、そしておそらく犯罪者さえもがスポンサーになって運営されていると信じ、にもかかわらず参加した人々は、自分たちの決定が、このイベントに仮定された開放的な知的根拠とはほとんど無関係な基準にもとづいて下されたことを、白状したはずである。コロラド大学の社会学教授エリーズ・ボールディングからの勇気ある自己批判的な手紙は、第4回「科学の統一に関する国際会議」への参加の招待状への彼女の是認と、のちの拒否について説明している。彼女の手紙は我々すべてに対し、理念には結果があり、そしてさらに、人々が結果になることを思い起こさせる。知識人の裏切り *trahison* にも限度がある〔原文は *trahison* だが、このフランス語の誤植だと判断した〕。

私が、会議の部会のひとつで、ケネス・ボールディングとともに共同主催者の役割を引き受けたとき、それは、会議の目的の強さと、他に知っていた参加者に基づいたことだった。その前年の会議の公刊された記録と、1975年に参加した人々の名簿には、私をもっとも高い尊敬を置く人々が含まれていた。当時は、我々全員が関心をもつ世界コミュニティを創造するという共同の営為を促進する、世界を意識した学者たちの素晴らしい機会に参加することに同意したようにみえた。福音主義のセクトがそういう会議に資金提供するのを選ぶことは、私には、不適切とは見えなかった。いまでは私は、そのセクトの性質と活動についていっそう理解しており、もはやそれが、国際的学術会議にとって適切なスポンサーだとは感じていない。統一教会の、世界キリスト教統一神霊教会 Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity〔統

一教会の1954年創設時の名称]の、道徳的な目的は、少なくとも言っても不明瞭である。私はとりわけ、以下の点を懸念する。

1. 朴政権への反対により韓国の指導的キリスト教徒の数人が投獄されている時、文師は政権との友好関係を享受したのみならず、明らかに、政府職員のための反共産主義者訓練学校を運営していた。2. 文師は、公的にニクソン大統領の弾劾に反対し、彼は神聖な権利によって統治したと発表した。3. 彼の反共産主義者活動と宗教活動は密接に結びついて多様な資金操作から支援されているらしく、移民局の捜査を引き起こしたが、彼の作業方式に関して、どんな透明性ももたらさなかった。それらを通じて彼が動くビジネス、宗教、学術および文化の組織のリストは、相互にいかなる説明できる関係ももたない。4. 彼の教義は、悪魔主義と彼の弟子たちの心霊的な繁栄という要素を含み、家族の価値とコミュニティ奉仕の精神にとって破壊的である²²⁾。

文のICUS会議について、もっとも意外な発見だった側面は、それが次々に、専門学会の臆病さと、高名な科学者たちが自分の研究のいっそう大きな意味とその活動が何を意味しているかを問いただせないことに、注目を求めたということだった。最終的に、文のグループの成功は、この専門的な機能不全によって説明される。いまでも我々は、合理性そのものの機能不全という、どんなときならば宇宙を統治しようという人々と関係すべきかを尋ねることへの、仮に全くの不賛成とはいわずとも、無能さ、という危険をおかしている。科学コミュニティの全体とその各部分が、権威主義的組織やスポンサーに寄稿する際の、それ自身の役割に誠実に取り組まない限り、それが、科学の文章ではきわめて一貫した主題である、解放のための力だと主張することなどではしない。

あらゆるイベントには皮肉の可能性がある。1976年のICUS会議も例外ではなかった。ワシントン・ヒルトン・ホテルは、スクエアダンスの年次舞踏会に出席した、数千人の、足を踏みならしフィドルを演奏するダンサーたちで溢れかえっていた。これら不屈の市民たちは——スカートを膨らませたパフスリーブの短いギンガム・ドレスの女性たちと、ウエスタン・スタイルのシャツとネックチーフの男性たちとは——人生を謳歌して、ぶっ続けて踊り続け、時としてICUSの議事進行をかき消しかねないほどだった。彼らもまた有益に思い起こさせる。普通の人た

ちも自分自身の出費で集会をするのであり、注意深く教練された聖職者による裁可もなしに楽しんで、人間コミュニケーションを打ち立てていることを、である。神は、ただおわすばかりではない。ときに神は、みずからの信徒たちを用いて、欺いたり、ひやかしたりもする。アメリカに祝福あれ God bless America。

訳注

- 1) 本論に現れる学者について略述する（役職は過去のものが多い）。エクルズは1963年ノーベル生理学・医学賞を受賞した英国の神経生理学者、ポッパーとの共著に『自我と脳』（既訳）。ソクタグはアメリカのポモナ・カレッジの哲学教授。カプランはアメリカのシカゴ大学の国際関係・国際政治学の教授。メランビーは英国の生態学者・昆虫学者。ウイグナーはハンガリー生まれのアメリカの理論物理学者で1963年ノーベル物理学賞を受賞。ラーナーはアメリカのマサチューセッツ工科大学教授で、戦後の中東における近代化とメディアの普及を調査した *The Passing of Traditional Society* (1958, 未訳) で知られる。ラスウェルはアメリカのイェール大学教授で、「コミュニケーションのラスウェル・モデル」、マスコミの内容分析、プロパガンダ研究、行動科学の主導などで知られた。セグレはイタリア生まれの国際関係論の教授で、イスラエルの外交官を務め、各国で教えた。ルーベンスタインはアメリカの宗教学者で、フロリダ州立大学などで教えた。ポッパーはウイーン生まれの英国の哲学者でロンドン大学経済校(LSE)の教授。デュフレンヌはフランスの哲学者・美学者。パリンダーは英国のロンドン・キングス・カレッジの比較宗教学の教授。ケストラーはハンガリー生まれの思想家で作家、『真昼の暗黒』『創造活動の理論』（既訳）など。ワイスはウイーン生まれの発生物学の教授で、アメリカのロックフェラー大学教授、アメリカ国家科学賞受賞者(1979)。オイラーはスウェーデンの生理学者・薬理学者で、神経伝達物質の研究により1970年のノーベル生理学・医学賞を受賞。ヘルツベルクはドイツ生まれのカナダの物理化学者で1971年のノーベル化学賞受賞者。ラムはアメリカの物理学者で1955年のノーベル物理学賞受賞者。カーンはアメリカの未来学者で軍事戦略家、ゲーム理論・システム理論家。マイケルはドイツ生まれのアメリカの中国学者、ワシントン大学とジョージタウン大学などで教えた。ナムは韓国生まれのアメリカのアジア史研究者、ウエスト・ミシガン大学韓国研究センター所長。リップセットはアメリカの政治社会学者。エチオーニはドイツ生まれのイスラエルとアメリカの社会学者。エリーズ・ボールディングはノルウェー生まれのアメリカの平和学の社会学者でダートマス・カレッジで教え、ケネス・ボールディングの配偶者。ネー

ジェルはオーストリア＝ハンガリー生まれのアメリカの科学哲学者。イーデルはアメリカの哲学者・倫理学者、ニューヨーク市立大学などで教えた。ケネス・ポールディングは英国生まれのアメリカの経済学者、コロラド大学ボルダー校などで教えた。メンドロヴィッツはアメリカの平和と世界秩序研究の教授。オーランスはアメリカの科学研究と高等教育の公共政策の研究者で、アメリカ科学財団、ブルッキングス研究所などに在籍。マクルーハンはカナダのメディア学者、『ゲーテンベルクの銀河系』『メディアの理解』（既訳）など。ケティはアメリカの精神医学者、ジョンズ・ホプキンス大学精神医学部長。フォークはアメリカの国際法学者、プリンストン大学教授。

2) 文中の〔 〕内は訳者による補足、[]は原文中の補足である。

参考文献*

- 1) Irving Louis Horowitz and James Everett Katz, *Social Science and Public Policy in the United States* (New York: Praeger Publishers, 1975).
- 2) Michael Young Warder to Irving Louis Horowitz, March 27, 1976.
- 3) John Lofland, *Doomsday Cult: A Study of Conversion, Proselytization and Maintenance of Faith* (Englewood Cliffs, NJ.: Prentice Hall, 1966).
- 4) Berkeley Rice, "Messiah from Korea: Honor Thy Father Moon," *Psychology Today* 9, (January 1976): 36-47.
- 5) Berkeley Rice, "The Pull of Sun Moon," *New York Times Magazine*, May 30, 1976, 18-25.
- 6) Daniel Batson, "Moon Madness: Greed or Creed," *Monitor* 1 (June 1976): 32-33.
- 7) Ann Crittenden, "Moon's Sect Pushes Pro-Seoul Activities," *New York Times*, May 25, 1976, pp.15, 16.
- 8) Kenneth L. Woodward, et al., "Life with Father Moon," *Newsweek*, June 14, 1976, pp.60-66.
- 9) Sun Myung Moon, "God's Hope for America," *New York Times*, June 3, 1976, p.42.
- 10) "Religious Cults: Newest Magnet for Youth," *U.S. News and World Report*, June 14, 1976, 52-54.
- 11) Rice, "Pull of Sun Moon," p.24.
- 12) Michael Young Warder to Irving Louis Horowitz, April 30, 1976.
- 13) Frederick Sontag to Irving Louis Horowitz, May 5, 1976.
- 14) Morton A. Kaplan to Irving Louis Horowitz, May 3, 1976.
- 15) Eugene P. Wigner to Irving Louis Horowitz, May 10, 1976.
- 16) Paul A. Weiss to Irving Louis Horowitz, June 3, 1976.

- 17) Daniel Lerner to Irving Louis Horowitz, June 8, 1976.
 - 18) Harold Orlans, "Ethical Problems in the Relations of Research Sponsors and Investigators," in *Ethics, Politics, and Social Research*, ed. Gideon Sjoberg. (Cambridge, Mass.: Schenkman Publishing Co., 1967), pp.3-24.
 - 19) Marshall McLuhan to Irving Louis Horowitz, June 7, 1976.
 - 20) Seymour S. Kety to Sir John Eccles, June 17, 1976 (copy sent to Irving Louis Horowitz from Kety).
 - 21) Saul H. Mendlovitz to Michael Young Warder, August 5, 1976. (copy sent to Irving Louis Horowitz from Mendlovitz).
 - 22) Elise Boulding to Irving Louis Horowitz, August 8, 1975.
- *私は、書簡がここに引用されたすべての人々に対して、彼らの指摘を私の論文中に再録する許可を与えてくれたことについて、感謝する。

【訳者解説】

アーヴィング・ルイス・ホロヴィッツの 学問について

後藤将之

ここに掲載したのは、Irving Louis Horowitz, “Science, Sin, and Sponsorship,” Chapter 16 of the Book, *Science, Sin, and Scholarship: The Politics of Reverend Moon and the Unification Church*, ed. by Irving Louis Horowitz, The MIT Press, 1978, pp.260–281. の全訳である。その内容は、訳出した本文に明らかな通り、1976年の「科学の統一に関する国際会議」への参加・協力をめぐって、科学者が政治的・イデオロギー的なスポンサーと、いかに適正に関係するかを考察したものであり、この主題で編まれた上記論文集の結論に編者ホロヴィッツが執筆し、当該書の巻末に置かれた一編である。また本論の初期版は、前年に『アトランティック・マンスリー』誌に掲載された (Horowitz, 1977)。過去の海外の論文だが、時宜を得た文献と考えて訳出した。

以上を述べれば必須の事実は提供されたことになるが、誰がどんな立場からこの論文集を編集し、本論を掲載し、また、なぜゆえ訳者がそれを翻訳したのかについては一定の説明が必要だろう。以下それらについて簡単に記す。

1. 著者とその業績について

アーヴィング・ルイス・ホロヴィッツ (Irving Louis Horowitz, 1929–2012) は、ニューヨークのハーレム生まれのロシア・ユダヤ系のアメリカの政治社会学者。ニューヨーク市立大学で学士 (1951)、コロンビア大学で修士 (1952)、アルゼンチンのブエノスアイレス大学で博士 (1957) をそれぞれ取得し、ブエノスアイレス大学、ワシントン大学 (セントルイス)、ラトガース大学などを含む、各国の多数の大学と研究機関で研究と教育に従事した。最終的にはラトガース大学ハンナ・アーレント殊勲社会学政治学大学名誉教授の地位を得ている。

ホロヴィッツ教授の業績は、その業績リストが一冊の書物として55歳時点で刊行 (Horowitz, 1984) されたほど多数かつ多岐におよぶ (訳者も全てに目を通せたわけではない)。だが彼単独の著作が独立の扱いで我が国に翻訳紹介されるのは、どうやら本論が最初ではないかと思う。やや異例な経歴であり、異例な受容にみえるだろう。この点について整理する (以下、彼の著書は、複数人の論文を集成した下記の編集本を除いて、全て未訳のようだ)。

ホロヴィッツの業績としては、第1に、早世した著名なアメリカの社会学者C・ライト・ミルズ (C. Wright Milles, 1916-1962) の教え子・共同者として、ミルズの急逝後、その論文集を編集したことが知られる (Milles, 1962, 1964c)。ホロヴィッツの文章の日本語への翻訳も、ミルズの没後の論文集への編者まえがき等として行われている。また、ミルズの残した仕事を完成させた初期の編集作業に、アナキズムを検討した多数の論者の論文を集成・解説した編著 (Horowitz, ed., 1964b) があり、同書は1971年に邦訳されている。

第2に彼は、ミルズの関心を継承して、プラグマティックなアメリカと、共産主義によったキューバなど、とりわけ発展途上諸国との、政治社会学的な比較研究を行い、これらの著作で評価されている (Horowitz, 1966, 1970a)。この過程で彼は、「第3世界 Third World」という概念を一般化させたといわれる。

第3に彼は、これもやはりミルズの関心事だったプラグマティズム的な社会学に関心をもち続け、1964年刊行のミルズに捧げられた社会学テキスト『新しい社会学』 (Horowitz, ed., 1964a) の編者としても、当時現地で注目された。同書は前半がミルズ社会学の再検討で、後半ではミルズ的な大局的な社会問題を考察した各種の論文を集成している。この後には、さらに体系的で写真と画像を多用した社会学テキストも編集している (Horowitz, et al., eds. 1971)。

また彼は、ハーバート・ブルーマーの記念論文集に寄稿し (Horowitz, 1970b)、ハワード・S・ベッカーと共著で論文を執筆し (Becker and Horowitz, 1971)、逆にブルーマーがホロヴィッツの編書に寄稿している (Horowitz, ed., 1967)。戦後シカゴ社会学と関連のある政治社会学者といえる。

第4に彼は、トランザクション・ソサエティを設立し、社会科学系の

学術雑誌「トランズ-アクション *Trans-Action*」などを編集刊行、ワシントン大学の院生だったロード・ハンフリーズの博士論文を弁護する論陣を張った（後藤, 2021）。ここから学術出版社のトランザクション出版 *Transaction Publishers* を設立、自身の著作を含む社会科学分野の非営利的な研究書を刊行した。「t」と「a」を組み合わせた同社のロゴ付の学術書を手にした研究者も多かっただろう。

第5に彼は、以上の問題関心の発展とみえるが、「国家が人を大規模に殺害すること＝ジェノサイド」の研究を刊行している（Horowitz, 2002）。また、各種の社会科学者を動員した、アメリカ軍による発展途上諸国への社会的介入（革命とゲリラ活動の抑止）に関する批判的な論文集を編集した（Horowitz, ed., 1967）。ここに一部を訳出した本書も（介入主体が国家ではなく宗教団体だが）、この研究に類したものとも考えられる。

第6に彼は、やはり自身の実経験の発展だろうが、書物の出版や学者のキャリアに関する、職業的な問題を含んだ学術研究書を刊行している（Horowitz, 1968, 1986）。これらの発展ともみえるが、社会学の当時の現状についての批判と提言を行って注目された（Horowitz, 1993）。

第7に彼は、自分自身の「黒人の多いニューヨークのハーレムでロシア・ユダヤ系移民の子として過ごした子供時代」を社会学的に回想した自伝『白昼夢と悪夢』（Horowitz, 1998）により、全米ユダヤ図書賞を受賞している。また、この系列の作業として、彼自身が折々に各所に執筆・寄稿した、多彩な知人学者の人となりと学風についての「学問的な人物評」を50件ほど集成した「知識人の学問と肖像」とも呼びうる人物伝をまとめている（Horowitz, 2004）。

以上略述した（これでも全てではない）業績は、一見して、かなり多様な領域での拡散的な仕事の履歴にもみえる。けれども知られるように、彼の師C・ライト・ミルズの著名な「社会学的想像力 *sociological imagination*」の概念は、自分自身の具体的な生の文脈（個人史）を、いっそう大局的な社会状況（歴史）とつねに関係させて認識する知的営為を意味する。（それは、シカゴ社会学の表現で言えば、「状況」内部の「個人」が、周囲の「状況」を「自己」との関係でたえず定義しようとする内省的な適応に向けた知的行動のことだろう。）この意味で、ホロヴィッツの学問生活それ自体が、全体として、師ミルズのいう社会学的

想像力を体現したものだといえると思う。

ユダヤ人としての彼が、国家による民族虐殺であるジェノサイドを研究すること。1960年代からのアメリカ社会学の新展開に反応し、その方向での論文集を編集して高評を得、次には社会科学の出版社をみずから創業運営し、さらにその経験をも生かして、書物の出版に関連する学術書を執筆したこと。自身のマージナルな子供時代を社会的に考察した自伝として公表し、知っている学者たちについて、個人的かつ学問的な視点からの論評・人物評を随時公表し、それらを学術研究へ集大成したこと。

これらの活動の総体が、「社会の中にある自分自身」を、「社会」と「自分」の双方に交互にウエイトを置きつつ検討しようとする、ミクロ的かつマクロ的でもある、ダイナミックな精神による「社会学的想像力の実践」を明示していると感じるのは、ひとり訳者（後藤）のみではないだろう。なお、本論からも自明のように、ホロヴィッツ自身は、そのアメリカ批判や社会科学の現状批判をも含めて、ミルズのそれを継承した、きわめて率直かつアメリカ的な進歩主義のリベラル知識人にみえる。彼の著作は慎重だが、しばしば痛快に感じられる。

この視点からみれば、ホロヴィッツの全仕事は、しごく一貫した社会科学的な営為だと考えられる。ホロヴィッツの仕事がそれほど我が国に紹介されていないのは、ひとつには、以上のような、彼の多岐・多年にわたる大量の仕事の全貌が、素描したような一定の社会的歴史的なパースペクティブのもとに把握されてこなかったからではないかと思考する。

2. 原著者と訳者とこの主題について

社会的危機の状況下では、社会学者にも社会に向けた一定の助言への期待が集まることは、むしろ当然であろう。端的に言って、社会問題への何らかの対処策を示すために社会学者が存在しているとも言える（それだけが存在意義では決してないが）。少なくとも、議論の参考となる資料を提供することは、社会学者の一定の義務ではあろう。この翻訳は、訳者のホロヴィッツへの多年の関心に加えて、たまたま生じた以上の問題意識からも着手された。

とはいえ、事件の根本的な問題の1つである「キリスト教と、その分

派ないしそれを自称する各種セクトとの関連性」は、記者には、かなり「遠い」主題でもある。ホロヴィッツはユダヤ・キリスト教系に近い立場から執筆しているとみえるが、記者の家庭は記録を辿れるかなり過去から仏教徒であり、記者自身もその自己認識のもとに生きてきた。確かに現地調査でモスクに入れば裸足で礼拝するし、キリスト教会では求められれば十字も切る（これらの作業は本論でのホロヴィッツの指摘によればやや不誠実かもしれないが、現地調査の円滑な遂行には必須である）。とはいえ自分が多年にわたる仏教信徒の末裔で、異教の問題を遠く眺めていることに議論の余地はない。パキスタンのイスラム社会では自分は Buddhist だと明言してそのように処遇され、研究でカリフォルニアに滞在中、キリスト教会へのお誘いを受けた時には、Thank you, but I'm a Buddhist. とお断りした（たいへん光栄に感じはした）。この論文にも、テーマの状況的な現代性や当時のアメリカ事情の記録と分析以外、記者はそれほど深い関心がない。

とはいえ、ホロヴィッツの著作全般と記者との付き合いは、実はゆうに30年を超えるものでもある。この意味では、記者は、著者の仕事にずっと興味を抱いてきたことになる。漠然とながら、彼の仕事を紹介してみたいとも考えていた。

最初に記者が入手したホロヴィッツ自身の著書は、1980年代半ばに入手した『キャメロット計画の興亡』(revised, 1974) だった。アメリカ軍による、社会学者を多数動員した、ラテンアメリカでの政治的な社会操作の実験プロジェクトの顛末を、多数の関係者が回顧的に検討したもので、今回一部のみ訳出した論文集とも基本的に類似の構成の、国際政治事件のモノグラフ的な研究である。

今でも鮮明に記憶しているが、1980年代後半に大学で開催されていた研究会で、この著作のレジメを作って報告した。社会科学を利用した国際的な政治・社会操作の研究例として、報告に好適だと判断したからだだった。

だが、内容がやや現実世界の国際政治に密着しすぎているためか、あまり良好な反応を得られなかった。「対処に困る」といった醒めた反応を感じて以後、ホロヴィッツはあまり公的に扱わなっていた。この「あり余るアクチュアリティ」こそが、彼の著作が学術的に翻訳されにくいもう一つの原因かとも思う（彼が論議したハンフリーズの上記の研究も

同様に思える)。ただし気になる著者だったので、以後も折にふれ文献を収集・検討してきた。訳者が『キャメロット計画』を入手したのも、そこにハーバート・ブルーマーが寄稿していたからで、その『シンボリック相互作用論』を翻訳中だった訳者は、収集可能なブルーマーの著作を集める過程で同書を見つけた。当初からシカゴ社会学に近い研究者に思えた。(ミルズの『社会学的想像力』にもブルーマーの指摘を受けたと謝辞にある。)

ホロヴィッツは、いわゆるシカゴ社会学やシンボリック相互作用論の内部の学者ではないが、ミルズの影響からか、明らかにシカゴの伝統を意識しそれに影響された、しかもマクロ政治の社会学を論じる研究者として、学説史的に意識せざるを得ない存在だった。じっさいホロヴィッツは、本書の冒頭「まえがき」にも「アンセルム・ストラウスの適切な表現では……」と記しており、彼がここでもシカゴ社会学を意識していたのを推測させる(ストラウスは彼のジェノサイド研究に序文を寄せている(Horowitz, 2002))。つまり「40年代後半と50年代初頭のシカゴ大学における概念の貧困化」(Lofland, 1970:38)の時代、ミルズやホロヴィッツらは、その志向性に触発された仕事をしていた。彼の知己には、ハーヴァード=コロンビア大学系の機能主義の社会学者もいるようで(何よりもミルズはコロンビアで教えた)、両者にわたる広い人脈上にあったようだ。

彼はまた、この翻訳からもわかるように、政治学に「科学者」として従事しており(じっさいアメリカ語ではPolitical Scienceであるが)、シカゴ的な発想を利用しつつ、あくまで政治「科学者」としてそこに関与する彼の姿勢は、むしろシカゴ社会学の一部以上に、シカゴ社会学的だとも感じられる(シカゴ社会学の社会科学観については後藤, 2017, 2018a, 2018bを参照されたい)。

宗教カルトの問題は、伝統的に、シカゴ社会学では慣例のように扱われてきた。それは、ロバート・パークが1921年に「集合行動 collective behavior」という概念を使った時(Park and Burgess, 1921)、その一部に宗教運動を含めていたからである。その後、1937年のパーク編集の社会学テキスト初版(Park ed., 1937)で、ブルーマーが「集合行動」の章を担当、ここでもその一部として宗教運動が扱われている(後藤, 1992)。その後のラングとラングによるセクト集団の検討(Lang and

Lang, 1961, p.181. ff) なども同様である。

以後、シカゴ系の社会学や社会心理学において、宗教運動や宗教カルトの研究は、むしろ定番的な問題関心として多く検討されてきた。代表的な初期の実例は、サンフランシスコなどでのカルトへの改心者を事例研究したジョン・ロフランドの学位論文と著作である (Lofland, 1964, 1966)。それ以前にも、シカゴ系の社会学ではないが、しばしば参照された「破滅の日カルト doomsday cult」の認知的不協和理論にもとづく研究である社会心理学者レオン・フェスティンガーらの『予言がはずれるとき』などがあつた (Festinger, et al., 1956)。

宗教やカルトの「教義の内容それ自体」などに注目しそれを問題視するよりも、むしろ集合行動の1タイプとしての宗教運動における、新人リクルートでの説得と転向の社会心理メカニズムや、大衆運動としての性質に注目し、他の集合行動の形式との比較においてそれを把握する、フラットでニュートラルな集合行動論の研究方向は、とにかく身構えがちになる宗教運動研究のスタンスとしては、過剰な関与や排斥を感じなくともすむ、便利なアプローチ法ではあろう。訳者も、このスタンスから、自分自身には異教の問題である宗教運動についても一定の興味を感じられたし、今回の翻訳にも取り組むことができた。本論でのホロヴィッツも、そのような研究系譜を前提とした問題へのアプローチをしていることは一読されればお分かりと思う。とにかく倫理性・道徳性の議論に集中しがちな宗教・社会運動の分析手法として、参考になればと考える。

3. 訳者における個人的な経緯と動機

最後に (ただし最小にではなく)、訳者が本論を訳出したもう一つの理由を示す。訳者は研究者としての40年以上の期間を通して、可能な限り、政治的な発言を公的に行うことを自制してきた。もし訳者の学問的立場に何らかのイデオロギー性が明示されるなら、それはアメリカ的な調査科学 research science のそれに尽きると思う (ポール・ラザースフェルト的にいえば、自分が関係した「行政調査 administrative research」の限界への自覚も含めて)。アメリカの社会心理学を研究していれば自然なことだと考える。

ただし、訳者も、過去に各種のイデオロギー的な立場を明瞭に扱った

作業に関与した経験がある。1977年後半から1978年3月の作業で、もはや45年ほど昔の学部学生時代のことだ。今回の翻訳は、訳者の個人的な自覚では、あれ以来の同方向での作業になるため、略述する。

当時、東京大学の学部1年生だった訳者は、1年後輩の1978年度入学予定クラスに向けた、どこの大学にもあるいわゆる「新入生オリエンテーション」の実施と、その際に配布される資料パンフレットの製作を担当するクラス内の委員に選任され、パンフレット編集担当として、新入生向けの当該配布物を制作した。この1978年度『オリエンテーションガイドブック』（手元に現物を保管）にはいくつか特徴があった。

第1にそれは、当時、訳者が自費で購入し使っていた商業用和文タイプライター（専用机に載ったTOWA製の巨大な装置）を用い、「ほぼ全て活字で文字組みされた印刷物」（B5サイズで約20ページ）だった。この種の配布物が活字で製作されることは、当時まったくとは言わず、かなり例外的だった（その購入と使用については、後藤、1999でも研究歴として「あとがき」に略述）。

授業に関するアンケート用紙を作成してクラスに配布し、回収した回答と原稿を整理・集約、和文タイプで版下化、これを近くの自治体の図書館で謄写版印刷機を申請利用し、50部ほどを謄写版印刷して製本した。つまり、アンケート実施、編集、字組み、版下化、印刷、製本を、相当程度まで訳者自身が負担して制作した（記事の寄稿等は、もちろんクラスからの全面的な協力で実施）。以上だけでも変わった作業で、筆記用具に和文タイプを使った個人は少ないだろう。

第2に、その内容に、「1年生の履修する授業科目について、受講したクラスの誰か1人が執筆した体験的な授業紹介を可能な限り掲載」し（総数約40件）、加えて「10項目にわたり、各項目5段階で、各々の授業をクラスを受講者たち（参加者35名）に評価してもらって、集計結果（平均値）を、一覧表に集約して掲載」した。当時から「受講者による講義紹介」は珍しくなかったが、このような社会調査の形式で、各種講義を10の要因（1. 話の聞きやすさ、2. ノートの取りやすさ、3. 内容の濃さ重さ、4. 学問的満足感、5. 退屈さの程度、6. 実授業時間、7. 欠講の頻度、8. 採点の厳しさ、9. レポート類の有無、10. 最終的判断）で評価した結果を、一覧表に集約する作業は珍しかったと思う。訳者はその10年以上後の1990年、勤務先の文部省の研究所で「学生によ

る授業評価」の研究に接したが、それに類した作業を（もちろん1977年の20歳学生という制約ゆえの未熟さはあれ）、この時たまたま実施したことになる。その後の訳者の高等教育の研究開発論文類も、こうした過去の実経験に影響されている。

第3に、当該ガイドブックには、オリエンテーション委員長の挨拶、先輩から後輩へのメッセージ、先輩所属のサークル紹介、大学周辺の飲食店レビューなどのコンテンツも掲載したが、そこに「セクト・ガイダンス」という2ページを、熟慮の末に収録した。これは、1977年当時ある程度活発だった大学内での思想・イデオロギー的な各種の組織・集団を、しごくフラットに事実依拠して通覧的に紹介するとともに、それらの性格や当時の出来事なども掲載して、入学したばかりで知識不足の新入生に情報提供するものだった。

当該部分からその目的を引用すれば、「我々安穩に卒業して小市民的満足を追求したいと思っている学内の大多数を占めるノンポリ人間はそれなりの予備知識を持って君子危うきに近よらずという構えを作る必要がある。……という次第で、以下いわゆるセクトに関する情報が述べられる……これは、その方面の通、某氏の原稿をもとに作製した」とある（後藤の文章。同書13頁）。

実際、この内容自体は訳者の執筆ではなく、上に示した通りクラスでその方面の情報通だった某氏からの寄稿「セクトに強くなる」を、形式を整えて掲載した（なお、上の引用に句読点が極端に少ないのは、要するに「和文タイプでは、漢字も句読点も1字を打つのは同じ労力なので、省力化のため」だった）。

この「ガイダンス」も、当時、ある程度画期的な現場レポートだったと記憶する。たまたまアメリカなど海外では、学生による体験的な授業レポートや学生生活案内などが活発に刊行されていることを聞いており、それに触発された。

驚いたことに、この『ガイドブック』は、オリエンテーション対象だった訳者の直接の後輩クラス50人ほどにとどまらず、ある程度広い範囲で、数年間、新入生らにコピーされて流布したと事後的に聞かされた（奥付に「禁無断転載」と明記したが、たしかに「不許複製」とはタイプしなかった）。このパンフレット（の特に「セクト・ガイダンス」）については、その後かなり経過してからも、時折、誰かから指摘を受け

ることがあった。なお、そこに紹介した各種セクトには、この翻訳で検討された団体が含まれていた。

訳者は、上に引用した45年前の自分の意見を現在まで特に変えていないが、こうした意図しない影響をも考慮して、そのような話題にはできるだけ言及せず、再度の取り上げも回避してきた。今回、自身の根深いノンポリティカル性（それには理由もあり、機会があれば述べる）を一時だけ棚上げにしてでもこの翻訳を行ったのは、上記した時と同様の危機意識を感じたからでもある。

以上、この翻訳は、ホロヴィッツの著作への訳者の多年の関心と、昨今の社会情勢と、訳者自身の過去の個人史的な社会関与とが、たまたま一致したために行われた。この翻訳が問題解決の一助になることを願うとともに、以上指摘した各種の事実が、一定の積極的な意味を持つことをも希望している。まったく政治的ならざるしらけた無気力の20歳であっても、日本語ワープロもなく、普通紙コピー1枚が100円近くした時代に、この程度の作業を普通に行っていた。これらはまた訳者の側における「社会学的想像力」の実践でもあると思っている。

なお、ホロヴィッツの文章は、彼自身の人生を集約したと言いたくなるもので、端的でdown to earthな口語的表現が、その学識を反映したアカデミックで微妙な修辞や比喩などと混交して現れる、明確だが複雑なものである。大きな誤訳はないと思いたいが、この意味で翻訳者泣かせの文体だと感じた。ハンナ・アーレント殊勲教授の文章を、訳者のごときが翻訳してよいかとも考えたが、喫緊の社会的必要性の意識からあえて実施した。この翻訳にご対応いただいたマサチューセッツ工科大学出版局、ラトガース大学社会科学科と同大学図書館に感謝し、『成城文藝』（印刷版・電子版）に限定した、排他的な翻訳権を主張しない翻訳掲載をご許可いただいたメアリー・カーティス・ホロヴィッツ氏に深謝する。また、掲載を慎重に検討され、訳文に詳細なご指摘をいただいた『成城文藝』編集委員会と匿名の査読者にも深謝します。この原稿の責任は訳者にあります。

最終的に、普通に社会親和的とは言いにくいとされる各種の集合行動が、一定程度まで制度的に制約されることには、やむをえない部分があると思う。

ただし、情報が十分に提供された場合でさえ、カルト集団に普通の人

が（強引な勧誘がない時でも）誘引されるのは、どんな内容であれ、当人には救済と感じられたことを必要とする個人が現存したからでもあろう（回避できない当初からの巧妙な勧誘があった場合はこの限りではない）。その意味で、苦痛と困難があまり存在しない社会（が実在するのなら）にはカルト集団は存在しにくく、その逆も妥当するだろう（同様のロジックをカルト集団でも正統化に利用するが、カルトとそれ以外は、「判別・回避・脱退の容易さ」でしばしば区別されている）。

結局、どんな知識も信条も、盲信されればカルト的な教条になる。一例として、1949年のノーベル生理学・医学賞は、前頭葉を切断するロボトミー手術を考案した外科医エガス・モニズ Egas Moniz に贈られたが、今日それがそのままで施術されることはない（脳への外科的な処置ならば以後も発達している。なお、この手術の国内での実施への反対が、医局制の問題などと並んで、いわゆる東大紛争の発端だったことも、かつては知られた事実だった）。

どれほど権威ある判断も、人間存在が完璧ではない限り、相対的に安定ではありえても、完全かつ永遠に正確ではない。科学のいかなる言明も、最終的ではない（Mead, 1936:286）。「学」はおそらく「懐疑」に始まるが、「信頼」を失うとき「懐疑」は「疑惑」に墮す。そして「懐疑」を欠く「信頼」とは「狂信」の別称である（後藤、1982（2020:111））。不完全な知識の中で、なお信頼を失わず懐疑しつつ生きることは、生の与件であって、近年に始まった人生の苦難ではない。

カルト的集団に問題があるのは自明としても、多くの不必要な苦痛と困難が適正な方法で少しでも社会から存在しなくなることで、無駄な苦しみを自分の人生と社会から受け取る人々が少なくなることを、1 訳者として願っている。訳者の 2022 年の夏は、ホロヴィッツの翻訳に捧げられた。今後は、既定の仕事計画を再開する生活に戻りたい。（2022 年 9 月）

The translator of this article wishes to express gratitude to The MIT Press and Sociology Department and the Library of Rutgers University for their advices. And deep gratitude goes to Ms. Mary Curtis Horowitz for her permitting us a not-exclusive translation right of this article (in printed & PDF versions).

参考文献

- Becker, H. S. and Horowitz, I. L., "The Culture of Civility," Horowitz, I. L. et al. (eds.), 1971, pp.209-215.
- Blumer, H., "Threats from Agency-Determined Research: The Case of Camelot," in Horowitz, I. L. (ed.), 1967.
- Festinger, L., Riecken, H., and Schachter, S., *When Prophecy Fails: A Social and Psychological Study of a Modern Group That Predicted the Destruction of the World*, Harper, 1956. (水野博介訳『予言がはずれるとき—この世の破滅を予知した現代のある集団を解明する』勁草書房 1995。)
- 後藤将之 編集・制作「セクト・ガイダンス」1978 年度東京大学新入生クラス用『オリエンテーションガイドブック』(後藤将之と 1 名の編集と記載) 13-14 頁 (当時の関係者との連絡・許可・同意が取れないため曖昧な形式で文献挙示)。
- 後藤将之『George H. Mead のコミュニケーション論について』(修士号請求論文、東京大学大学院社会学研究科) 1982。(成城大学大学院文学研究科『コミュニケーション紀要』31:1-172、2020 として公刊)
- 後藤将之「ハーバート・ブルーマーの社会心理学」後藤将之訳『シンボリック相互作用論』255-314 頁、勁草書房、1992。
- 後藤将之「あとがき」『マス・メディア論』有斐閣、1999。
- 後藤将之「シカゴ社会学の鍵概念——トーマスとミード」『成城文藝』242:44-66、成城大学文芸学部 2017。
- 後藤将之「シカゴ社会学の鍵概念 (その 2) ——トーマスとトーマス」『成城文藝』243:46-72、成城大学文芸学部 2018a。
- 後藤将之「シカゴ社会学の鍵概念 (その 3) ——トーマスとトーマスとシプタニ」『成城文藝』244:1-24、成城大学文芸学部 2018b。
- 後藤将之「ロード・ハンフリーズのティールーム交渉の研究をめぐって——その今日的な再検討」『成城文藝』256:19-49、成城大学文芸学部 2021。
- Horowitz, I. L. (ed.), *The New Sociology: Essays in Social Science and Social Theory in Honor of C. Wright Milles*, Oxford Univ. Press, 1964a.
- Horowitz, I. L. (ed.), *The Anarchists*, Dell Publisher, 1964b. (今村五月・江川允通・大沢正道訳 I・L・ホロヴィツ編『アナキスト群像』社会評論社 1971。)
- Horowitz, I. L., *Three Worlds of Development: The Theory and Practice of International Stratification*, Oxford Univ. Press, 1966.
- Horowitz, I. L. (ed.), *The Rise and Fall of Project Camelot: Studies in the Relationship between Social Science and Practical Politics*, The MIT Press, 1967, revised 1974.
- Horowitz, I. L., *Professing Sociology: Studies in the Life Cycle of Sociology*, Aldine, 1968.
- Horowitz, I. L. (ed.), *Cuban Communism*, Transaction Publishers, 1970a.

- Horowitz, I. L., "The Academy and the Polity: On Social Scientists and Federal Administrators," Shibutani, T. (ed.), *Human Nature and Collective Behavior: Papers in Honor of Herbert Blumer*, pp.334-353, Prentice-Hall, 1970b.
- Horowitz, I. L. and Strong, M. S., assisted by Talbot, G. A. (eds.), *Sociological Realities: A Guide to the Study of Society*, A Transaction Textbook, Harper & Row, 1971.
- Horowitz, I. L., "Science, Sin, and Sponsorship," *The Atlantic Monthly*, March, 1977: 98-102.
- Horowitz, I. L., *Taking Lives: Genocide and State Power*, Routledge, 1979. Transaction Publishers, Fifth ed., Revised ed., 2002.
- Horowitz, I. L., *Bibliography of the Writing of Irving Louis Horowitz 1951-1984: Presented in Honor of His 55th Birthday by Colleagues and Friends*, pp.93, Routledge, 1984.
- Horowitz, I. L., *Communicating Ideas: The Crisis of Publishing in a Post-Industrial Society*, Oxford Univ. Press, 1986.
- Horowitz, I. L., *The Decomposition of Sociology*, Oxford Univ. Press, 1993.
- Horowitz, I. L., *Daydreams and Nightmares: Reflections of a Harlem Childhood*, Routledge, 1998.
- Horowitz, I. L., *Tributes: Personal Reflections on a Century of Social Research*, Transaction Publishers, 2004.
- Lang, K. and Lang, G. E., *Collective Dynamics*, Thomas Y. Crowell, 1961.
- Lofland, J., *The World-Savers: A Field Study of Cult Processes*, Ph.D. Dissertation, pp.603, The University of California at Berkeley, 1964.
- Lofland, J., *Doomsday Cult: A Study of Conversion, Proselytization, and Maintenance of Faith*, Prentice-Hall, 1966.
- Lofland, J., "Interactionist Imagery and Analytic Interruptus," Shibutani T., (ed.), 1970b, pp.35-45.
- Mead, G. H., *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, The Univ. Chicago Press, 1936.
- Milles, C. W., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Milles*, Horowitz, I. L. (ed.), Oxford Univ. Press, 1962. (青井和夫・本間康平訳『権力・政治・民衆』みすず書房 1971。)
- Milles, C. W., *Sociology and Pragmatism: Higher Learning in America*, Horowitz, I. L. (ed.), Oxford Univ. Press, 1964c. (本間康平訳『社会学とプラグマティズム』紀伊國屋書店 1969。)
- Milles, C. W., *The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press, 1959. Paperback Penguin Books 1970. (鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店 1965。)
- Park, R. E. and Burgess, E. W., *Introduction to the Science of Sociology*, The Univ.

Chicago Press, 1921.

Park, R. E. (ed.), *An Outline of the Principles of Sociology*, Barnes & Noble, 1937.

(Later editions of the mostly same contents edited by A. M. Lee, with a new title of *A New Outline of the Principles of Sociology*, 1947.)